

2023年度神戸大学文学部公開講座「人文学を解き放つ」

< 講義概要 >

9月23日(土) 13:40~15:10 濱田 麻矢 教授

文学史に潜り込む：中華民国期のだめんず事情

中国文学には長い歴史がありますが、恋愛が文学の主要なテーマになりうる、と考えられるようになったのは20世紀になってからのことです。

恋愛が自由であるためには、当事者が自由な思想を持ち、自分の愛情を自分で決定するのが当然だという前提が必要です。しかし前近代の東アジアでは、女性が自分自身の人生を決定しうるのだという発想はありませんでした。婚姻とは、何よりもまず男児を産み育ててイエを守るための慣習でしたから、それが叶わないときには蓄妾することが自然だったわけです。

1920年代ごろから自由恋愛は中国のインテリの間で大いに流行しましたが、恋愛が崇高であることが声高に論じられた一方で、自由恋愛という振る舞いが、特に女性にとってどんなに危ういものだったかは見過ごされてきたようです。封建的な結婚を振り切り、自由に生きていく若者が喝采を浴びた一方で、自由恋愛という過酷な競争に敗れた者、特に女性に対しては冷酷な視線が向けられました。この講座では、家長に決められた結婚から脱出した女性作家白薇を取り上げます。出奔した白薇は、留学先の日本で目眩くような恋愛を経験しました。しかし相手の男性は彼女の恋を受け止めるでもなく、拒絶するでもなく、複数の女性と交際を重ねます。全てをかけた恋愛が脆く崩れた時、彼女はどのようにして心の平衡を保ったのでしょうか。叩きつけるように書かれた長篇自伝から読み解きます。

9月23日(土) 15:20~16:50 小寺 里枝 講師

「芸術」という、古くて新しい概念——「アルス ロンガ、ヴィータ ブレヴィス」を手がかりに

「芸術の本質とは何か」——この問いの答えを探るのは「玉ねぎの皮を剥くようなもの」だと、ある人は言いました。たしかに、剥いても剥いても、玉ねぎには「本質」にあたるような「芯」はありません。「本質」を探しているあいだに、皮だけでなく身まで剥いてしまう危うさと滑稽さを示唆するこの比喩は、「芸術」を考察する上での“問いのたて方のまずさ(・・・)”を指摘するべく発せられたものでした。一方、この喩えは「芸術」なるものの捉え難さをよく言いあらわしています。概念としての「芸術」の曖昧さは、こんにち「芸術」の名で呼ばれているところの多様さを考えてみても、あきらかでしょう。それだけではありません。たとえば「アート」と「芸術」という言葉を何気なく使い分けている人は多いですが、その基準はいったいどこにあるのでしょうか。多くの人は、あらためて問われると答えに窮してしまうのではないのでしょうか。

本講座では、古代ギリシアに端を発し、古代ローマに引き継がれ、ルネサンス期以降に幾度となく繰り返され、現代の日本でも引用されるラテン語の銘句「アルス ロンガ、ヴィータ ブレヴィス (Ars longa, vita brevis)」を手がかりに、古くも新しい「芸術」という概念の変遷をたどります。

9月30日(土) 13:30~15:00 久山 雄甫 准教授

霧囲気学とはじめ—いま、ゲーテを読みなおす

神戸大学大学院人文学研究科では、2022年、新学術領域としての「霧囲気学」を創出・展開するため、KOIAS（神戸霧囲気学研究所：Kobe Institute for Atmospheric Studies）を設立しました。HPはこちら（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/koiias/>）です。時代の「空気」、社会の「ムード」、政治の「風向き」、経済の「景気」、故郷の「におい」など、人の生活はつねに霧囲気につつまれています。さらにはコロナ禍やDXなどの社会的激変と相まって、霧囲気をめぐる議論は将来ますます重要になるでしょう。その中でKOIASも人文知に立脚した意義のある活動を展開していきたいと考えています。ところで、こうした「霧囲気学」の源流のひとつは、実はドイツの詩人ゲーテの文学と科学に見出せます。200年も前に生みだされた古典が、いかに今日の学術領域と切り結ぶのか。このたびの公開講座では、ゲーテに依拠して哲学的「霧囲気」概念を展開した現代ドイツの哲学者ゲルノート・ベーメの思想を紹介しながら、『色彩論』や『ファウスト』などのゲーテ作品に眠っていた種がまさにいま芽を吹きつつある様子を、霧囲気をめぐる学問の国際潮流、そしてKOIASの今後の課題もまじえながら、ざっくばらんにお話しします。

9月30日(土) 15:10~16:40 佐々木 祐 准教授

移動の文化・文化の移動：メキシコにおける中米移民の経験から

グローバルな「南」/「北」という分断は、歴史的・社会的・政治的に措定され、こんにちの新自由主義的な世界再編の中でさらに再編・強化されつつある。そうした「南」から「北」を目指して移動する人々の姿は、現代世界においてもはや「ありふれた風景」となっている。その代表的な事象の一つが、中南米・カリブ諸国から幾重もの国境を通過し、“El Norte (北/目標)”として想定されるアメリカ合衆国へと向かう移民たちの潮流である。かつては合衆国への「非正規移民」の送り出し国であったメキシコだが、近年ではむしろ他国からの移民の通過経路として、そしてまたその受け入れ国としての性格を強めている。

本講座では、メキシコにおいて滞留・還流しているこうした移民たちの経験から出発し、国境を超えた移動＝「移民/難民に『なる』こと」という社会的経験が、当事者や関係者によって具体的にどのように意識されまたその行為選択や社会関係構築にどのように作用しているのかを考察する。

思いもよらぬ出会いや発見、そしてもちろん危険や暴力・収奪に満ちた移動過程における様々なアクターとの交渉を通じ、移動を続ける人々はその目的を達成するために、自らの経験と存在を再検証する作業、つまり別様な「主体」として自らを構築し再提示する必要性に直面する。母国における、それ自体としてはもちろん耐えがたいあれやこれやの経験や悲惨、身体に刻まれた傷痕は、そうした作業における「資源」としての新たな意味を与えられる。

不確定な世界に否応なしに投げ込まれ、持てるあらゆる「資源」を賦活しながら生き延びるこうした移民・難民の生は、しかし、この日本に生きる我々のそれとさほどかけ離れたものではないことがここで示される。